

地域社会学入門 (続)

—未完のプロジェクト, マッキィーバーの community 論を基軸に—

山本 努¹⁾

1. 地域社会学は地域での生活を理解しようとする学問である

地域社会学とは地域社会 (community) での生活を理解しようとする社会学の一専門分野である。生活とは『広辞苑』(第6版)によれば、「生きながらえること、世の中で暮らしてゆくこと」などとあり、まことに茫漠とした概念である。したがって、生活はいろいろな観点から考察される。たとえば、籠山京(1984: 61-65)は労働、余暇、休養のエネルギー消費(A, B, C)の総和と、エネルギー補給(a, b, c)の総和の大小から「国民生活」の構造を研究した。ここにあるのは、国民に共通の生活の型である⁽¹⁾。

これに対して柳田国男(1967: 9)は「日本は地方的に久しくいろいろの異なる暮らし方をしてきた国だ」ということで「郷土生活」の研究を提唱する。籠山は「国民」生活であり、柳田は「郷土」生活である。ここでは、生活を研究する視点が大きく異なる。柳田は「村を同じくする近隣の親爺同士すら、はや生活の流儀を異にしているにもかかわらず、各自の親々に対しては…決まり切った型しか考えていない。…これまで政治家などの頭にある村なり農家なりは、各人めいめいの限られた見聞によって、一つの型をこしらえて、それが全国を代表するように思っているのである。千差万別賢愚貧富の錯綜した今日の社会相は、そんな穀物の粒のような揃ったものなかから生まれていない」と考えるのである。

このように生活にはいろいろな捉え方がある。そこで、社会学にとっての「生活」だが、それは社会での生活というべき領域である。社会での生活という時の「社会」という語は、本来はやっかいな言葉である(山本, 2023a)。しかし、本稿においては、社会での生活を「①個人が行う行為・行動、②個人の持つ意識、③個人の関与する社会関係や社会集団」の総体と理解する(以下、社会での生活を生活と略記する)。つまり、人はさまざまな他者(社会関係や社会集団)との関わりで、さまざまな考えや気持ち(意識)を抱き、さまざま行い(行為・行動)をするが、その総体はその人(個人)の生活である。たとえば、上司(=他者)のパワハラに怒り(=意識)、抗議する(=行為・行動)、子ども(=他者)の成長がうれしくて(=意識)、誕生日のお祝いをする(=行為・行動)などがそれである。もちろん、上司(=他者)のパワハラに腹が立つが(=意識)、我慢する(=行為・行動)などというのもある。我慢は外部から見えないが、これも行為・行動(内的行為)である。ここで想起されているのは、内的、外的、放置、我慢などを含む、ウェーバーの行為概念である⁽²⁾。地域社会学とはそのような生活の理解に地域社会という枠組みが第一義的に重要と考えるのである。

¹⁾ 神戸学院大学現代社会学部現代社会学科

これに対して、地域社会という枠組みを第一義的には重要とは考えない社会学の専門分野もある。家族社会学、職業社会学、宗教社会学…などがそれである。これらは家族生活、職業生活、宗教生活などの生活の特定領域を研究する。たとえば、家庭での家事の分担はどうなっているのだろうか。職場の人間関係はどのようなものだろうか。宗教教団に入信した人びとの生活はどのようなものだろうか…などといった具合である。しかし、そうはいつても、家族一般や、職業一般や、宗教一般というものは存在しない。あるのは特定の地域や階級や民族といった具体的な背景をもつ、特定の家族や職業や宗教である。たとえば、アン・オークレー (1980) のロンドンの主婦の調査、尾高邦雄 (1995: 198-255) の出雲のたたら吹き職業集団の調査、宗教社会学の会編 (1985) の生駒の神々の調査などがそれである。このように地域社会学でなくても、ロンドン、出雲、生駒とあるように地域社会は無視できるものではない。

2. コミュニティというアイデア：定義、原型

このように生活の理解には地域社会は一般的にも重要だが、地域社会学は地域社会という概念に特段の重要性を与えている。このような考え方はマッキーバーのコミュニティ (community) という概念に由来する部分は大きい。したがって、コミュニティという概念は地域社会学に非常に重要である。そこで資料1にマッキーバーのコミュニティの簡潔な説明を載せておく。「コミュニティという用語は社会学の中でもっともわかりにくく、あいまいな語のひとつ」と説明する辞書もあるが (アパークロンビー他, 1984=1996: 59), 資料1の説明は明晰で有益である。味読して欲しいが、次のような意味である。

コミュニティの特色は、その中で人の生活すべてが営まれているということである。人は会社組織、あるいは、教会の中で生活のすべてを営むことはできない。しかし、人は部族、あるいは、都市の中でなら生活のすべてを営むことができる。したがって、コミュニティの基本的特徴は、人の社会関係のすべてがその中に見いだせるかもしれないということである (以上、資料1の山本訳)。

この和訳からコミュニティの生活包括性という特色が見えてくる。この生活包括性は「人の社会関係のすべてがその中に見いだせるかもしれない」ということだから、現実には包括していることもあるが、包括する可能性に留まっている場合もあると理解したい。つまり、コミュニティの生活包括性には、現実としての生活包括性と、可能性としての生活包括可能性を含む。

ただし、この和訳を読んだ読者はそれでも異論を感じるかもしれない。たとえば『カラマーズフの兄弟』に出てくるゾシマ長老は修道院の中で暮らしている (女子修道院に潜伏する『レ・ミゼラブル』 (第2部第6編から第8編, 岩波文庫 (豊島与志雄訳) 第2巻204-364頁) のジャンバルジャンとコレットでもいい)。そうであれば、修道院もコミュニティではないのか。さらには、刑務所はどうか。この疑問については後 (9.) にふれるので、ちょっと待っておいて欲しい。ともあれ生活包括的な (いいかえれば、生活のすべてがそこで営まれている) コミュニティとして、以下

資料1 コミュニティの意味

“The mark of a community is that one's life may be lived wholly with in it. One cannot live wholly within a business organization or a church; one can live wholly within a tribe or a city. The basic criterion of community, then, is that all of one's social relationships may be found within it.”

出典：Maciver & Page (1950: 9)

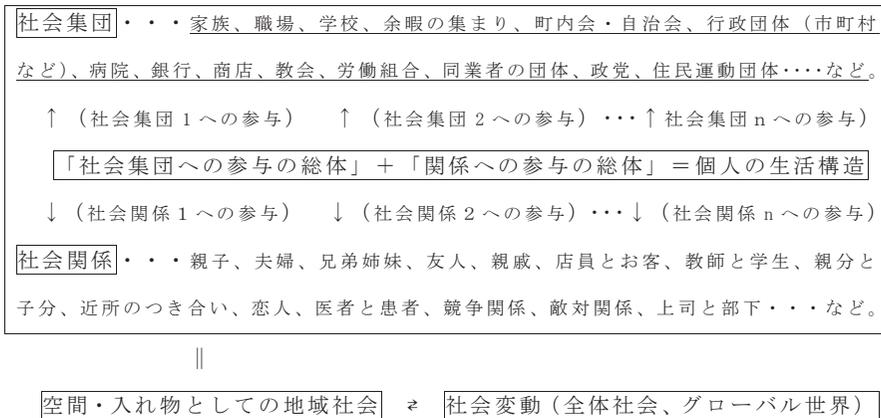


図1 地域社会と生活構造

出典：筆者作成

のようような状態を示しえるだろう。

すなわち、人々は地域社会(コミュニティ)の中で家庭生活を営み、学校に行き、仕事をし、遊びに行き、病院に行き、買い物に行き、友人と付き合い、人々と助け合い、お祈りをする…。つまり人々の生活の(ほぼ)すべてが地域社会の中にある。これを模式的に示したのが図1である。これによれば、①地域社会という空間(小さな全体社会、入れ物)の中に、たくさんの集団や社会関係がある。②人は種々の構造的制約を受けながらも、それらの集団や社会関係に、一応、主体的・選択的に参与(ないし関与)しながら、③いろいろな意識(気持ち、考え)をもち、④いろいろな行為・行動をとる。

3. コミュニティの用法

さて地域社会(コミュニティ)の意味は今までの説明で一応は、理解できたと思う。しかし、いまひとつ釈然としないものが残るのではないだろうか。資料1のコミュニティの例示でも部族(tribe)ならコミュニティであることへの理解は容易である。たとえば、多くの国々の先住民を考えてみればいだろう。本多勝一(1963)の『極限の民族』のカナダ・エスキモー、アラビア遊牧民、ニューギニア高地人でも、石坂啓ほか(2021)や本多(1993)の和人と接する前のアイヌ民族でも、クローバー(2003)の最後の野生人の北米のネイティブ・アメリカンでも想起すればいだろう。ここにはコミュニティがあるのは明確である。部族は明らかに生活包括的だからである。

では、資料1の都市(city)はどう考えたらいいだろうか? ここで都市とは古代の都市ではなくて、現代の先進国の都市を考えてみたい。たとえば、神戸やサンフランシスコ…はコミュニティだろうか? 神戸やサンフランシスコは、部族と同じ程度には生活包括的だとは言えないように思える。だが、部族ほどではないにしても、相当、生活包括的でもあるだろう。さらには国家(state)をどう考えたらいいだろう。日本やアメリカという国家は神戸やサンフランシスコよりも生活包括性が大きいような気がする(本当だろうか?)。では、国家はコミュニティだろうか?

ここで地域社会(コミュニティ)とはどのような意味かをはっきりさせる必要がある。ただその前に、地域社会とコミュニティという2つの言葉が出ていることに注意したい。実は、地域社会とコミュニティとは、厳密に考えれば同じ意味ではない。Communityの和訳自体、基礎社会、共

同態(体), コミュニティ(とカタカナ表記), 地域社会などさまざまあるのが現状である。とはいえ, コミュニティと地縁性の類縁は大きい。コミュニティは土地の境界 (territorial boundaries) で決まってくることが多いからである (Maciver, 1917: 109-110)。したがって, コミュニティを地域社会という意味で使う場合は少なくない。

ただし, 地域社会との類縁性を小さくみる使い方もある。この場合は, コミュニティをゲマインシャフト(共同態)というドイツ語と等しい意味で用いる。社会学の世界では極めて影響力の大きいテニースの名著に『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』という書物がある。この書物の英訳は『*Community and Society*』であるが, Gemeinschaft (ゲマインシャフト) から Community (コミュニティ)への翻訳はまったく無理のない (easily enough) ものらしい。これに対して Gesellschaft (ゲゼルシャフト) から Society (ソサエティー) への翻訳はやや無理 (difficult) があるとのことである (Nisbet, 1966: 74)。

そのゲマインシャフトだが, 原型は親族集団である。それに村落共同体, カースト, 民族集団, 宗教組織などが含まれる (ニスベット, 1970=1977: (1) の243-244)。さらにゲマインシャフトは「単なるロカールコミュニティ以上の意味」を持ち, 「高度な個人的親密性, 深い情緒性, 道徳的献身, 社会的凝集性, および時間的持続性」によって特徴づけられている。また, 「コミュニティは…個人をあれ (one) これ (another) といった個々の役割によって考えるよりも, 個人の全体性 (wholeness) を基礎において考える」(Nisbet, 1966: 56)。したがって, コミュニティ(ゲマインシャフト)は「根強く持続的な集合的アイデンティティ」という特徴を持つ。そこには「深い連帯の倫理」があり, 「他の連中に対するわれわれ」という明確な意識がある (ニスベット, 1970=1977: (1) の243-244)⁽³⁾。これはマッキンバーの使い方とはかなり異なる。ではマッキンバーにおいて, コミュニティという用語がどのように使われているか次節で見ておこう。

4. マッキンバーのコミュニティとは

マッキンバーのコミュニティとはまず, 開拓者の入植地 (pioneer settlement) や村 (village) や町 (town) や都市 (city) や部族 (tribe) や国 (nation, country) などのことである (Maciver, 1921: 9; Maciver & Page, 1950: 8)。ここで国の例が挙げられているが, これは国家 (state) を意味しない。コミュニティ(としての国)は, アソシエーションとしての国家よりも先にあるのである。コミュニティ(としての国)はいつできたのかはわからない。このコミュニティとしての国(nation, country)と, アソシエーションとしての国家 (state) 違いは, 建国記念日(や独立記念日)があるかないかで識別できる。コミュニティは意図的に作られたものではない(not deliberately created)。したがって, 始まりもないし, 誕生の時も持たない (no beginning, no hour of birth) ののである (Maciver 1921: 9; Maciver & Page 1950: 8-9)。すなわち, 「国家がまだ存在しないところに, コミュニティは存在していた(There has been community where no state yet existed)。今日でも我々は, エスキモーの人々の中に, 国家に含まれない共同生活の原始的形態 (primitive forms of communal life still uncoordinated within a state) を見つけることができる」かもしれないのである (Maciver, 1917: 30-31)。

このコミュニティとしての国と, アソシエーションとしての国家の違いを想起するには, 資料2の歌詞は役に立つように思う。カリフォルニアからニューヨークの島々まで, レッドウッドの森からメキシコ湾まで広がっている国 (land) は, 僕と君のために作られているんだと唄うアメリカの民衆の歌(フォークソング)である。この歌はもちろん国歌ではない。人々の歌であり, あな

たと私 (つまりみんなの) のために作られた「アメリカ」という国について歌っている。ここにあるのがコミュニティと理解していいだろう。これ対してアメリカ国歌の「星条旗(The Star-Spangled Banner)」は、明確に国家誕生の時(米英戦争のマクヘンリー砦の戦い)を歌っている。

練習問題 資料2のWoody Guthrie (ウッディー・ガスリー: 1912年オクラホマ州生まれ, 67年没)はアメリカのフォークソングの祖型を作った人物である。彼のThis land is your land(日本人歌手の邦訳でもいい)を聞いてみよう。それで、考えたこと, 感じたことをメモしておこう。村上春樹は彼をアメリカの国民詩人と見る。スタインベックによれば, 彼の唄には, 圧迫に抗して立ち上がろうとする人々の意志, つまりアメリカ人の魂と呼んでもいいものがあるという(村上, 2005: 243-276)。

資料2 This land is your land 作詞・作曲Woody Guthrie

This land is your land,
This land is my land,
From California
To the New York Island,
From the redwood forest,
To the Gulf stream waters,
This land was made for you and me.

この国はあなたの国
この国はわたしの国
カリフォルニアから
ニューヨークの島々まで
レッドウッドの森から
メキシコ湾の水流まで
この国はあなたとわたしのために創られたんだ

As I was walking,
That ribbon of highway,
I saw above me
That endless skyway,
I saw below me
That golden valley.
This land was made for you and me.

わたしが歩いていたとき
あのリボンのようなハイウェイで
わたしがその上で見たのは
あの途切れることのない高架式道路
わたしが見たのはその下の
ゴールデンの谷
この国はあなたとわたしのために創られたんだ

(以下はレコーディングでは割愛された歌詞ですが、この部分の歌詞を読むとウデイ・ガスリーがこの歌に込めた想いがよく分かると思います。)

As I was walkin'
I saw a sign there
And that sign said no trespassin'
But on the other side
It didn't say nothin!
Now that side was made for you and me!

わたしが歩いていたとき
わたしはそこである警告を見た
その看板が云うには「不法侵入禁止」
でも他のところでは
そんなこと言ってなかった
そうさあの場所だってあなたとわたしのために創られたんだよ！

In the squares of the city
In the shadow of the steeple
Near the relief office
I see my people
And some are grumblin'
And some are wonderin'
If this land's still made for you and me.

街の広場で
尖塔の陰で
救援オフィスの近くで
わたしはわたしの同胞たちを見る
ある者はぶつぶつ不平をつぶやき
ある者は訳が分からず困っている
この国はまだあなたとわたしのために創られたものなのかな

Nobody living can ever stop me
As I go walking
That freedom highway
Nobody living can make me turn back
This land was made for you and me

誰もわたしが生きてゆくことを止められないし
そんなふうにはわたしは歩き続ける
あの自由のハイウェイを
誰もわたしの生きざまを巻き戻すことはできない
この国はあなたとわたしのために創られたんだから

出典：<https://magictrain.biz/wp/?amp> (2023/07/18 取得)

5. マッキィーバーのアソシエーションとコミュニティ

前節でアソシエーション (association) という言葉も出てきたので, 説明しておこう. 人間は目的達成のためにいろいろ行為する. マッキィーバーによれば, それには3つのやり方があるという. ひとつは独力で行為する. ひとりで頑張ることである. マッキィーバーはこれを孤立 (isolation) とよぶ. これで達成できることは少ない. 2つ目は闘争 (conflict) である. ここでは, 人々は互いに争って目的の達成を目指す. しかし, この方法は一定のルールがなければ, 危険で消耗的であり, 社会の存続を危うくする. 闘争の多くは, 経済の競争のように, 社会的に制限されて, 一定のルールのもとで行われている. そして3つめの方法が共同による目的追求 (co-operative pursuit) である. この3つめの方法は偶発的 (spontaneous) な場合もあるし, 綿密に考えられた訳ではないような (casual) 場合もある. たとえば, 見知らぬ他人が (見知らぬ他人に) たまたま援助を申し出るといったような場合がそれである. 映画『OK牧場の決闘』の伝説の保安官ワイアット・ホープと元歯科医師で博打打ちのドク・ホリデーの友情, 助太刀を考えればいいだろう (同じく西部劇映画ならアラン・ラッド主演の『シェーン』でもいい). あるいは, コミュニティの習慣で決められた場合もある. こちらはたとえば, 収穫時の農家の助け合いのような事例である. これらに対して, ある関心・利害 (interest) を共同で追求する目的のために意図的に (expressly), 集団を組織することがある. 『OK牧場の決闘』なら悪党一味のクラントン一家 (『シェーン』なら同じく悪党のライカー一家) はこれである. ここにおいてアソシエーションが生み出されることになる (Maciver & Page, 1950: 11-12).

したがって, アソシエーションの定義は, 資料3のようになる. つまり, ある1つの関心, あるいは, 一群の関心を共同で追求するために組織された集団がアソシエーションである. その事例を示せば, 表1のようである. それぞれのアソシエーションは特定の関心・利害でつくられ, それぞれの活動の基盤になる制度 (institution) を持っている. これを言い換えれば, アソシエーションは, 「何のために存在するのか?」を問うことのできるものであり, 特定の関心からその問いに答えることができる (コミュニティならそれはできない). さらにそのアソシエーションのメンバーである事の意味 (membership) は, その関心との関連で限られた意義においてもたれるものである (こちらもコミュニティならそうはいかない). たとえば, われわれはスポーツ (あるいは, 体を動かす楽しみ) のためにアスレチッククラブに所属する, 生計 (あるいは利益) のために会社に所属するといったようにである. さらにこのような性格からアソシエーションはコミュニティ (たとえば, 村や町) の中にたくさんあり, 一人の人が多くのアソシエーションに参加することもある (Maciver & Page, 1950: 12). たとえば, コロンビア大学の前学長のバトラー氏は, 数十のアソシエーションに加えて, 20のクラブに参加していたことが知られている (Ogburn and Nimkoff, 1940: 258-260). マッキィーバーによれば, 孤立 (isolation) や闘争 (conflict) で得られる利得 (gain) は, アソシエーションで得られる利得に較べて, はるかに少なく, 狭く, ずっと危険なものである. これは人間がゆっくりと学んだ教訓なのである (Maciver, 1921: 65-66).

資料3 アソシエーションの意味

“We define an association, then, as a group organized for the pursuit of an interest or group of interests in common.”

出典: Maciver & Page (1950: 12)

表1 アソシエーションの事例

アソシエーション	特徴的な制度	特定の関心
家族 (Family)	結婚, 家庭生活, 相続	性 (sex), 家庭を持つこと (home), 家柄・親である事 (parentage)
大学 (College)	講義と試験, 学位取得	学習, 職業につく準備
会社 (Business)	簿記, 合併, 株式資本	利益
労働組合 (Trade union)	労使間の団体交渉, ストライキ, ピケ (スト破り監視)	雇用保障, 基準賃金, 労働条件
教会 (Church)	信仰の体系, 宗派・教派, 礼拝の諸形式	宗教的信念
政党 (Political Party)	地区党員集会, 党の機関 (幹部), 党の綱領	政権, 権力, 政府の政策
国家 (State)	憲法, 法典, 政府の諸形態	社会秩序についての一般的規制 (general regulation of the social order)

出典：Maciver & Page (1950: 18)

さてこの表1で重要なのは、家族と国家はコミュニティではなく、アソシエーションであるという点である。ここには、コミュニティとアソシエーションを区別するよい判断基準がある。まず家族だが、未開社会の家族（厳密には親族集団 (kin-group)）はコミュニティだが、現代の家族は明確にアソシエーションである。現代の家族は家族員の共同生活の全体 (whole common life) ではない。さらに現代の家族は、婚姻契約 (marriage contract) で意図的作り出されており、特定の目的で組織化された共同生活の一部であるからである。アソシエーションとは、このように成人メンバー (adult members) の特定の契約 (covenant: 誓約) によってできている (Maciver, 1921: 10)。

さらに国家もアソシエーションである。この点は従来、混乱があつて、国家をコミュニティと見なす政治理論があつた。この国家観は国家の無制限の統治権 (unlimited sovereignty: 主権) を支持していた。しかし正しくは、国家はコミュニティの中での諸々の権利と義務 (enforceable rights and obligations) の体系を担うアソシエーションである。そして、それは秩序と自由の基盤でもある。このような意味で、国家はコミュニティに必要な不可欠なアソシエーションである。たとえば、元々はコミュニティに起源があつた財産 (property: 所有) 制度を国家が引き継いで、法制度にした。このようにアソシエーションが元々はコミュニティの中にあつた制度を引き継いで保護することは少なからずあつたのである (Maciver, 1921: 10-11)。

このことを言い換えれば次のようである。「コミュニティははじめから存在したが、国家は(ある時に)作られたのである (Community was there from the first, but the State has been constructed.)。国家は社会的存在の人間が意図して作り、今もそれを維持することを意図しているようなアソシエーションなのである。かくて、国家の意志よりも根本的なコミュニティの意志が存在する。それは国家を持続させよう (maintain) と望む意志 (will) である。だから、人々が国家破棄 (anarchism) の原理を採ったら、国家はなくなるだろう」 (Maciver, 1917: 130, 1975 (邦訳): 155があるが訳文を変えている。以下、この書籍からの引用は同様)。では人びとが国家破棄の原理を採ることは、あり得るのだろうか。あるかもしれない。つまり、それを Imagine all the people と唄っているのが、ジョン・レノンとオノ・ヨーコのイマジンだが (資料4)、ここにある、all the people もコミュニティである。これについては、後で触れる。

資料4 Imagine—John Lennon/Yoko Ono

Imagine there's no heaven,
It's easy if you try,
No hell below us,
Above us only sky,
Imagine all the people
living for today…

思い描いてみて, 天国なんて無いと
君がやっても簡単なこと
僕らの下には地獄なんてなくて
僕らの上にはただ空だけ
思い描いてみて, みなさんも一緒に
今日のために生きていることを

Imagine there's no countries,
It isn't hard to do,
Nothing to kill or die for,
No religion too,
Imagine all the people
living life in peace.

思い描いてみて, 国なんてないと
やってみれば難しいことじゃない
殺すことも死なすこともない
宗教もないと
思い描いてみて, みなさんも一緒に
平和に生きる人生を

Imagine no possessions,
I wonder if you can,
No need for greed or hunger,
A brotherhood of man,
Imagine all the people
Sharing all the world…

思い描いてみて, 財産なんてないって
君にできるだろうか
欲張ることも空腹も必要がない
人の兄弟愛を
思い描いてみて, みなさんも一緒に
世界を一緒に共有していることを

You may say I'm a dreamer,
but I'm not the only one,
I hope some day you'll join us,
And the world will live as one.

君は言うだろう 僕を夢想家だと
でも僕はたった独りの人間じゃない
僕はいつの日か君も僕たちと一しょになってほしいだ
そして世界がひとつになって生きてくれればと

出典) <https://magictrain.biz/wp/2022/10/post-24953/>
2023/07/23 取得

6. マッキンバーのコミュニティ：国家との対比

さて前節までで、コミュニティとアソシエーションの大枠の理解は得られただろう。本節ではその理解をさらに明確なものにするために、いくつかの重要な説明を付け加える。マッキンバーのコミュニティは、前節に見たように国家よりも根源的な存在である。しかし、国家をアソシエーションと見ず、コミュニティ(という根源的な存在)と誤解する国家理解があったというのは前節で紹介した。この事例は、マッキンバーでは、ヘーゲルと新ヘーゲル学派の国家理論ということになるが(Maciver, 1917: 28, 425-433)、マッキンバーとほぼ同じ時代を生きた、日本の皇道哲学の国家観の中にも見ることができる。

たとえば、佐藤通次の『皇道哲学』⁽⁴⁾によれば、「『日本』は、人類唯一の倫理的國家であると共に、また唯一の論理的國家である。もし、日本にして滅びるならば、「人間」の存在の意義も共に失われるであろう(佐藤, 1941: 407)」という。さらに、「人はわが国に生まれ、わが国に生き、わが国の中に没する。人の一切の営為は、国の事を出でず、人と人との一切の關係は、国における君臣の対面に含まれるのである(佐藤, 1941: 394)」。ここに示された佐藤の認識は、マッキンバーと完全に違いがある。マッキンバーの政府論では、「われわれは諸々のコミュニティの中に住んでいるが、諸々の國家の中に住んでいるのではない」(マッキンバー, 1947=1954: 225)。この違いは資料1のコミュニティの意味と比較してみても、一目瞭然である。さらには、「日本の國體は、まさしく、神力のいたすところであり」「大和の生命體」であり、「國家は、本來的に、不死のもの」でなくてはならず、「わが皇國は、永遠の未來によって光被される絶対の現存であって、その肇はあるも、その終わりはない」(つまり、「神州不滅」な)のである(佐藤, 1941: 380-390)。

ここに示された認識は、マッキンバーのアソシエーションとしての國家の理解と大きく違いがある。國家は諸々のアソシエーションを調整する特別なアソシエーションである。したがって、「正義」の名の元に「ここまではよい、ここから先はだめ(Thus far and no further)」と言うだろう(Maciver, 1921: 89)。しかし、國家を含めてアソシエーションはコミュニティの器官(organs of community)であり、國家(state)や教會(church)や家族(family)や産業(industry)を作ったのはコミュニティなのである。それで、コミュニティはそれらすべてのアソシエーションに制限(limit)を与えるのである(Maciver, 1921: 94)。つまり、コミュニティはすべての社会的事実を作る。したがって、コミュニティはすべての基盤(matrix, 母體)であり、苗床(seed ground)である(Maciver, 1921: 80)。

このようなマッキンバーのコミュニティとアソシエーションの理解(特に、國家はアソシエーションであるという認識)は、現代の日本人にも非常に重要である。

7. マッキンバーのコミュニティの定義(1)：かつてのコミュニティ

さてここまででアソシエーションはかなり明確に説明してきたように思う。コミュニティはアソシエーションにあらざるものだから、その限りではコミュニティのイメージもかなり鮮明になっていると思う。しかし、やはりコミュニティについては追加の説明が必要のように思う。前出の資料1のコミュニティの定義は明確だが、やはり、部族(tribe)と都市(city)は違う。先にエスキモーの人びとには、國家に包含されないコミュニティがあるかもしれないと書いたが、これはたとえば、次のようなモースのエスキモーの村落のモノグラフなどを見れば理解は容易である。

「(日常の食糧に関しては：筆者補筆)…狩獵者は、獵場がいかに遠くても、自分がどれほど飢

えていても、獲物はすべてテントに持ち帰る。この道德律の厳格さは、ヨーロッパ人の感嘆の的である。手に入れることができた獲物やさまざまな産物は、それを獲得した者が誰であろうと、彼のものでなく、彼の家族に属するのである。しかも、このような愛他主義は、負傷者や病弱者に対して示される冷淡さや無関心と奇妙な対照をなしている。負傷した者や病弱な者は、家族の移動について行けなくなると見捨てられてしまうのである」(モース, 1906=1981: 107-108)。実際、女兒(あるいは男女)の嬰兒殺し、病弱な幼児の殺害、老人と病人の遺棄、寡婦の遺棄はエスキモーの部族で行われていた。これは、「養わなければならない成員数を限定するためであり、… 嬰兒殺しは明らかに非狩獵者の人数を減らすことが目的である」(モース, 1906=1981: 139-140)。しかも、「冬の間の権利義務関係は、夏のそれとはまったく異なる」(モース, 1906=1981: 108) というのである。

ここにあるのは明らかにかつてのコミュニティである。コミュニティとは、その中で人の生活すべてが営まれているということであったが(資料1)、エスキモーの生活のすべてはここにある。エスキモーのコミュニティは、上記のような家族規範をもったコミュニティだったのである。コミュニティのこのような性格を捉えて、マッキィーバーは次のように言う。「コミュニティとは、共同生活(common life)が営まれる圏(circle, 仲間)のことであり、その中で、人びとは生活の様々な局面において、ある程度は自由にお互いに関係しあい、共通の社会的特性を示すのである」(Maciver, 1921: 9)。この「共通の社会的特性」とは、相互に関係しあうことで生まれてきた、社会的類似(social likenesses)、共通の社会的観念(common social ideas)、習慣(customs)、伝統(traditions)、共属の意識(the sense of belonging together)である。そして、この故に、コミュニティは全体的(integral)なものであって、部分的(partial)ではない。つまり、コミュニティとは、共同生活の全体的な圏(the whole circle of common life)であり、それはどのようなアソシエーションよりも包括的で、より自然に生まれてくる(spontaneous)のである(Maciver, 1921: 9)。

8. マッキィーバーのコミュニティの定義(2): 現代のコミュニティ

このようにコミュニティとは、何らかの共同生活の圏(仲間)である。しかし、現代社会では前節(7.)のエスキモー(あるいは、マッキィーバー自身の例示なら、人口100人に満たないカリフォルニアのYurok族)のように小規模で、孤立して(isolated)、すべてがそこに含まれていて(all-inclusive)、他のコミュニティから独立(independent)しているようなコミュニティはきわめて少ない(Maciver & Page, 1950: 9)。前節の都市(city)と部族(tribe)が異なる所以である。これをどう考えればいだろうか。

これについては、マッキィーバーのコミュニティ概念は、コミュニティに自給的であることを求めている(Communities need not be self-sufficient)ことを確認しておきたい。現代のコミュニティは、規模は先のYurok族よりもはるかに大きいのが、自給性ははるかに小さいのである。経済や政治の相互依存性は大きな現代コミュニティ(great modern communities)の主な特性となっている。現代人のわれわれは、仮に村(village)のような比較的小さなコミュニティに暮らしていても、同時代の資本主義圏などの丸ごと全体の文明の範囲内にいる⁽⁵⁾。あるいは、さらにもっと広い範囲内に同時に所属しているのである(the whole area of our civilization or even wider)。文明化されたコミュニティ(civilized community)は自らよりも大きなコミュニティから自らを切り離す壁を築くことはできない。仮に一国の支配者が“鉄のカーテン”で仕切っても、仕切りきれないのである

(Maciver & Page, 1950: 9).

したがって、現代のコミュニティはより大きなコミュニティの中にある。町 (town) が地方 (region) の中に、地方が国 (nation) の中に、国が (今、発展しつつある) 世界コミュニティ (the world community) の中にあるようにである (Maciver & Page, 1950: 9)。マッキーパーの現代コミュニティとは、このように大きなコミュニティと小さなコミュニティ (the great and small community) が多層的、重層的組み込まれたものである。マッキーパーの認識では、コミュニティは歴史的に拡大して、国 (the nation) とか、あるいは世界 (the world) というような存在にまで広がっている。ただし、国とか世界が村や近隣を排除するわけではない。村や近隣の性格が変わるかもしれないが、大きなコミュニティも小さなコミュニティも必要なのである。

大きなコミュニティ (the great community, the larger community) はわれわれに機会、安定、経済、より多様な文化、平和、保護、愛国心、(時には) 戦争、自動車やラジオの類を提供する。小さなコミュニティ (the smaller community) はより近くでの親密な満足、友人、友情、おしゃべり (gossip)、対面的な競いあい (face to face rivalry)、住んでいる地域への誇りやそこでの住まい (local pride and abode) をもたらすのである (Maciver & Page, 1950: 11)。

9. マッキーパーのコミュニティの定義 (3) : 現代のコミュニティ・続

前節のような現代コミュニティのありようはMaciverの名著『*Community*』ではやや抽象的に次のように述べられている。重要な文言なのでやや長い引用しておく。「私はコミュニティという言葉で、村 (village) であれ、町 (town) であれ、地方 (district) であれ、国 (country) であれ、さらに広い範囲 (even wider area) であれ、共同生活のいずれの範囲 (any area of common life) をも意味する。この範囲はコミュニティと称する以上は、自分自身の特徴で向こうの他のエリアから区別されなければならない。…中略…人が一緒に暮らすところではどこでも、種類や程度はいろいろだが、他のところとの区別を示す共同の特徴 (distinctive common characteristics) ができてくる。作法 (manners)、伝統 (traditions)、しゃべり方 (modes of speech) などがそれである。これらのものは、現実の共同生活がそこにあることを示す標識 (signs) であり、帰結でもある。」(Maciver, 1917: 23)。

以上の引用はコミュニティという言葉の基本的な使い方である。ここにあるのは、①村や町や地方や国やさらに広いものを含めた共同生活が、②作法、伝統、しゃべり方など共同の特徴を作り、③それによって、コミュニティの存在が識別できる、ということである。このコミュニティの定義はのちにより定式化されている。すなわち、「コミュニティはある程度の社会的凝集 (social coherence: 社会的な結合の緊密さ) で区分 (marked) された社会生活の範囲であり、コミュニティのベースはローカリティ (地域性 locality) とコミュニティ・センチメント (community sentiment, コミュニティ感情) にある。」(Maciver & Page, 1950: 9-10)。ここでローカリティとは、地理的範囲 (geographic area) とか、共通の大地 (common earth) などと言い換えられている。また、コミュニティ・センチメントは共属感情 (feeling of belonging together) とか、ある生活の仕方を共有していることの自覚・気持ち (awareness of sharing a way of life) のことである。

このようなコミュニティの典型は、エスキモーの村、辺境の街 (frontier town)、ケベックのフランス人 (French Quebec) のような半ば孤立したコミュニティである。また先述 (2.) の修道院 (monastery) や女子修道院 (convent)、さらに刑務所 (prison) は一応、コミュニティと認定できる。

ここにも共同生活の領土 (territory) ないし区域 (area) が認められるからである。ただし、そこに住む人々の対しての機能は限られている。したがって、これらをコミュニティと見ないという見解もある。修道院のゾシマ長老が「あのな、アリヤシャ…お前という人間は、この僧院の壁から外へ出て行っても、結局修道者として世をわたる運命じゃ」(ドフトエフスキー, 1961 (2巻): 292)という時、ここには修道院の機能の限定性がある。とはいえ、人間に対する機能はコミュニティの性質によって常に限定されている。かくて、修道院などもコミュニティに含んでおくことにしたい (Maciver & Page, 1950: 10)。

しかし現代社会では通信装置・交通機関が拡張する (the extending facilities of communication) ことでローカルな結びつき (local bond) は程度はともかくも、弱体化している。その結果、原始的な社会では決して見られなかったことが出現する。現代社会では社会的凝集性やコミュニティ・センチメントが欠如した区域が現れるのである。大都市の行政区分の区 (ward) や区域 (district) とよばれるエリアがそれである。これら居住区 (“neighborhood”) はコミュニティとはいえない (Maciver & Page, 1950: 9-10)。ここにはそのエリアとの一体感 (conscious identification) を作り出すのに十分な接触 (contacts), あるいは、共通の関心 (common interest) が欠けているのである⁽⁶⁾。

練習問題 大都市の行政区分の区 (ward) や区域 (district) は、エリアとの一体感 (conscious identification) を作り出すのに十分な接触 (contacts), あるいは、共通の関心 (common interest) が欠けている場合があるという。大都市に住んでいる人は、どんなエリアが該当するか、具体例を考えてみよう。

10. マッキィーバーのコミュニティの定義 (4): 現代・未来のコミュニティ

それではコミュニティは消えるのかといえば、そうではない。通信装置・交通機関が拡張すること自体がより広大な、しかしそれでも依然として地域的・領土的なコミュニティ (territorial community) といった状態となるのである。ここから、先の8.でみた「大きなコミュニティ」と「小さなコミュニティ」の分解が起こる。現代文明 (modern civilization) はこの分解をもたらす諸力を解放する。すなわち、運輸・通信手段の発達など技術的諸力、あらたな産業によるより広いエリアでの経済的交換や市場の要請という経済的諸力、さらには、一国の思想や芸術や科学は文明の翼で他国に伝えられるという文化的諸力などがそれである。

さてこのようにして広がる地域的・領土的なコミュニティは、かつての原始社会に見られたような、完全に自足的なコミュニティに再び向かうかもしれない。それにもっとも近づいた (マッキィーバーにとって最新の) 事例は国家社会主義ドイツ (ナチのドイツ) やソビエト連邦のロシアのような巨大な国家コミュニティであった。しかし、それらとてもやはり自足的コミュニティにはなり得なかったのは証明済みである。ただし、これらは挫折したのだが、一つの世界 (one world) は数世紀にわたって形成途上であるとマッキィーバーは考える。コミュニティの境界を地球全体にまでに拡張しないことには、完全な自給的なコミュニティは見つからない。我々はそのような時代に近づいているというのである (Maciver & Page, 1950: 11)。

ただし、このようなコミュニティの拡張という現実を認めたくない対抗的な努力をする人びともいる。偏狭な愛国者とか民族主義者を考えればいだろう。とはいえ、マッキィーバーは世界

を範囲にした政治的機関 (political agencies) の展開はコミュニティの拡張という事態に一致するものだという (Maciver & Page, 1950: 11).

このコミュニティの拡張という展望はあまりにも楽天的な夢かもしれない。しかし、先 (5.) の資料4の歌 (Imagine) は世界中の人に向かって歌われ続けている。ここにある、all the peopleもコミュニティであると先に述べた。それは、次のようなマッキィーバーのコミュニティの理解から明らかである。重要な文言なので引用しておく。実はこの文章は前節のMaciver (1917: 23) の引用につづく文章である。できれば引き返して一つながりで読んでみるといいだろう。「一つのコミュニティはより広いコミュニティの一部だったりする。また、すべてのコミュニティは程度の問題 (a question of degree) でもある。たとえば、外国の首都に暮らす英国人は英国人同士の親密なコミュニティでも暮らしているが、その国のより広いコミュニティでも暮らしている。これは共同生活における程度と強度 (intensity) の問題である。その共同生活の一つの極は全世界の人々である。それは一つの大きい (great) が、茫漠とした (vague)、まとまりのない (incoherent) 共同生活である。他方の極は小さくて (small)、強い (intense) コミュニティで、普通の個人の暮らしがその中で営まれている。それは共同生活の非常に小さな核 (a tiny nucleus of common life) であり、時にはより大きく、時にはより小さく、いつも変動している外辺 (fringe、境界) を持っているのである。…中略…われわれはより強力な共同生活の核 (the nuclei of intenser common life) と都市 (cities) と国 (nations) と原始的な種族 (tribe) を区別はするが、それらのどれも立派な (par excellence) コミュニティと考えているのである」 (Maciver, 1917: 23)。

かくて、コミュニティは茫漠とした全世界の人から、非常に小さな緊密な核にいたるまで想定できる。つまり、資料4の歌 (Imagine) の all the people も (茫漠としたものかもしれないが) コミュニティの一部である。このようなマッキィーバーのコミュニティの拡張は、コミュニケーション施設の拡張によってできた国民 (nations) というコミュニティも認めるのでアンダーソン (1991=2007) の「想像の共同体 (imagined communities)」も含む。しかし、さらに all the people (世界中の人々) も含む。したがって、マッキィーバーのコミュニティはジョン・レノンとオノ・ヨーコの先達として、アンダーソンの「想像の共同体」のその先の地球コミュニティを見据える壮大な概念なのである。

11. マッキィーバーのコミュニティの定義 (5) : 現代・未来のコミュニティという問題についての確認

このような壮大な射程を持つマッキィーバーのコミュニティ概念であるが、荒唐無稽な問題意識ではないことを確認しておきたい。かつての社会学や社会心理学では、この問題ははっきりと学問的に意識されてきた。たとえば、高田保馬の世界社会論やオールポートの内集団論などがそれである。高田は「世界社会というのは何よりもまず世界の全面にわたる地域社会である。それは地球の表面に住む限りの相作用する人々を包括する。而もそれは他面において人類という極めて広義における血縁の結合である意味において、付随的に何等かの意味において血縁社会である」 (高田, 1947: 6) という。高田によれば、かつての日本では「ヘーゲル国家論の影響があまりに強すぎた。世界の結合が忘れられ、ことに世界国家の形成を永久に亘りて否定するがごとき主張が学問の名において行われきた」が、それはおかしいというのである。「世界の思想界と学会とは未だにこの問題に直面することを怠っていると思うが…世界社会の問題は私にとりて何等新しき問

題ではない」のである (高田, 1947: 1-4).

さらには, アメリカの社会心理学者のオールポート (1961: 39-40) は図2の内集団を示して, 「人類は内集団を構成しうるか」を問うている. 内集団とは, 「あいつら (they)」でなく, 「私たち (we) 自身」のものと感じられる集団のことである. 言い換えれば, その集団で起こる様々な事態 (その集団の栄光であれ, 悲惨であれ) が「無関心な他人事」ではなく (更には, 反目 (antagonism) を感じる何ものかでもなく), 「自分 (達) の重要な事」として感じられ, 「無関心」でいることが難しい集団のことである. つまりわれわれが忠誠心 (loyalty) を感じる集団のことである (山本, 2016: 35-38).

そこで, 「想像力が豊かでもなく, よく旅行をするのでもない」, つまり普通の人は, 「人類という内集団が実在すると思わせるために, シンボル—今日ではほとんど欠けている—を求める. …それらは世界への忠誠心という考えを発達させる精神的な足がかりとなる上で, 非常に必要なことである」という (オールポート, 1961: 40). 先の資料4の歌 (Imagine) もそのシンボルの1つと考えてもいいのでないだろうか.

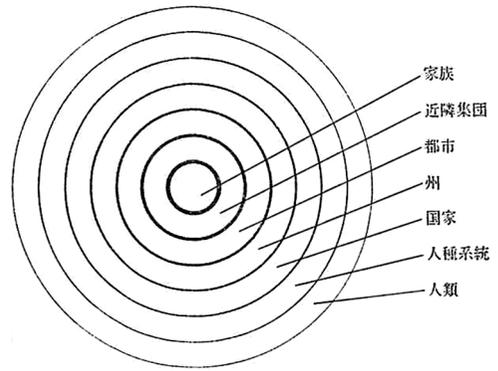


図2 メンバーシップが包括的になるにつれて内集団の潜在力が減少していくという仮説図
出典：オールポート (1961: 39)

練習問題 自分の内集団の具体例を挙げてみよう. また, 自分の所属するコミュニティの具体例を挙げてみよう.

12. 地域社会学の未完のプロジェクトとしてのマッキィーバーのコミュニティ

以上, マッキィーバーのコミュニティについて触れた. コミュニティというカタカナ言葉はすでに, 世の中はかなり知られた言葉といってよい⁽⁷⁾. ただし, コミュニティの原義であるマッキィーバーのコミュニティについては, 意外に知られていないように思う. そこで本稿でやや詳細に説明した. ここから地域社会学 (community sociology) は未完のプロジェクトであることが分かる. 地域社会学は普通は都市社会学と農村社会学を総称する学問と理解されている.

しかし, マッキィーバーのコミュニティはそれ以上の多くの重要な問題を含む. 町や村や都市や巨大都市をコミュニティと考えるのは, マッキィーバーも一緒だが, それよりもコミュニティの原義はずっと広いのである. マッキィーバーのコミュニティは「共同生活の場」と考えてよいが, その「場」は地球コミュニティから極小の「核」にまで及ぶ. それでほとんど手をつけられていない領域は少なくとも3つはある. 世界 (地球) コミュニティの社会学, 国というコミュニティの社会学, コミュニケーション施設の拡大と現代コミュニティの変容・拡張の社会学が, それである.

8. 9. 10. の説明にあったように, コミュニケーション施設の拡大を中心とした「文明」が「大きなコミュニティ」と「小さなコミュニティ」を作ったことをみた. 伝統的な地域社会学はこの2つのコミュニティの内, 「小さなコミュニティ」の研究に主力を注いできた. 地域社会学は「比較的小規模の地域社会を全体社会として把握し, いわばこれを究極の全体社会の縮図として考察」

してきたのである(新明, 1985: 26). ここでの研究は, たとえば, リンド(1929=1990)の『ミッドウルトン』などが古典だろうが, 非常に重要である.

しかし, マッキンバーのコミュニティ論の含みは, ①「自足的な小さな原始(ないし伝統的)社会のコミュニティ」から, ②「文明」が「大きなコミュニティ」と「小さなコミュニティ」を作り, コミュニティがかつてあった自足性を失い, ③再び, 自足的地球コミュニティに向かう可能性を探る, という3つの段階を貫く壮大なものである.

この内, ①の「自足的な小さな原始(ないし伝統的)社会のコミュニティ」の地域社会学, ②の文明(現代)社会の「小さなコミュニティ」の地域社会学の学問的蓄積はある⁽⁸⁾. 逆にいえば, ②の「大きなコミュニティ」と, ③の地球コミュニティに向かう可能性を探る地域社会学は弱いと言わざるを得ない. 既存の地域社会学に, ②の「大きなコミュニティ」に関する学問的蓄積はなくてはならないのだが, やはり弱い. これは, 鈴木栄太郎の『国民社会学原理ノート(鈴木栄太郎著作集7)』あたりから学ぶのがいいだろう. さらに, ③の「地球コミュニティに向かう可能性」についての地球コミュニティ(形成)研究はさらに乏しい. 先に触れた高田保馬の『世界社会論』及び『社会学概論』などから「世界社会化」の実現性を学ぶあたりがスタートになる. 国際社会学やグローバル・ソシオロジーにも魅力的な研究はある. ベック(1996=2003, 1986=1998)の(世界)リスク社会論などをあげておきたい. コミュニケーション施設の拡大と現代コミュニティの変容と拡張の社会学は, インターネットやスマートフォンなどの普及で興味深い研究の場ができつつある⁽⁹⁾. この分野はクーリーの近代的コミュニケーションの議論が古典になりうるように思う.

「鉄道, 電信, 日刊紙, 電話という現体制における変化とその他のことがらは, 生活のあらゆる面を一種の革命にまきこんだ. …おそらく, この新しいメカニズムのうちで日刊新聞ほど広範かつ特徴的なものはないだろう. それは極端に非難されるし, 賞賛もされるのであって, どちらも相応の理由がみられる. 人が妻や子供と会話するかわりに, 世界中のゴシップが書きつけられた一種のスクリーンを顔の前に広げ, 朝食の席につくことを考えてみるとよい. 何と奇妙な行為だろう」(クーリー, 1909=1790: 73). 1909年に刊行された古い文章だが, 日刊紙をスマホに変えたら, 今日のことを語っているようである. 地域社会学の未完のプロジェクトは今後の展開を待っているのである.

13. 地域社会学の存立根拠: アイデンティティと帰属の感覚から(補遺1)

本稿の最後に重要な補遺として, 地域社会(コミュニティ)の日常的な重要性を確認しておきたい. それによって地域社会学の具体的な存立根拠または研究対象を示すためである.

先(12.)に見たように, 地域社会学は「比較的小規模の地域社会を全体社会として把握し, いわばこれを究極の全体社会の縮図として考察」してきた(新明, 1985: 26). 「全体社会」とは, 人々の生活が一応, 自足的に累積, 完結している社会の範囲(たとえば, 日本社会とか, アメリカ社会とか)のことである(山本, 2023a: 28-29; 2022: 18-19). であれば, 地域社会は個人のアイデンティティ(つまり, 「自分とは誰か」という自己定義)の一部となるはずである.

「あなたは誰か」と問われればわれわれは, われわれは年齢(子どもか大人か…), 性別(男か女か…), 家族(未婚か既婚か…), 職業(教師か弁護士か鉄鋼労働者か…), 民族(日本民族かアイヌ民族か…), 宗教(仏教か, キリスト教か…), 世代(戦前世代か, 団塊の世代か, バブル世代か, 就職氷河期世代か…)などで答えるだろう. しかし, それらのパーツがどこの地域社会にあ

るかによって、その意味は大きく変わってくる。

たとえば、町の子と村の子、都会の学生と地方の学生、都会の未婚者と農村の未婚者、都会の大人（「大阪のおばちゃん（おっちゃん）」と「東京のおばちゃん（おっちゃん）」）と田舎の大人（「おばちゃん（おっちゃん）」）は違うだろう。地域社会には都市と農村があるが、都市と農村で人々の暮らしは随分、違う。この違いは、別掲の「子どものお手伝い」にも鮮明に現れる。農村の農家の「子どものお手伝い」は家業を担う貴重な労働力である。都市のサラリーマンの家族ではそうはいえない（山本，2024:資料1，資料2，参照）。また、同じ都市や農村の中でもどのような地域なのかによっても人々の暮らしは随分、違う。たとえば、同じ大都市（の神戸）でも、空き部屋の目立つ高齢化した公営団地コミュニティと、（都市景観大賞を得た神戸の三宮駅周辺の）都心部と、（神戸の）里山の小学校校区エリアとの違いは大きい。そこに住む人々は、相当異なったアイデンティティをもつだろう。

練習問題 同じ都市や農村になかにもいろいろな地域がある。地元のlocal新聞を読んでいろいろな地域の記事を集めてみよう。

さらに地域社会（コミュニティ）はわれわれが社会的な人間として参加したり、交流したり、体験したりする場を与える。この交流や参加や体験（つまり、コミュニティの中でしたこと、コミュニティのためにしたこと）は、「可視化され続け、匿名の市場に消え失せはしない」（ラジャン，2019=2021: 15）。資料5のように消えていく地域の活動を人々の記憶に刻み込んだりたり、資料6、資料7のように石に刻み込まれたり、資料8、資料9、資料10のように街や村の記念碑として建立されたり、資料11のように神社の芳名板に名前が残されたりするのである。資料9、資料11は戦前に熊本県の須恵村に調査のため訪れた、アメリカ人類学者のエンブリーの記録である。資料11の寄付については、エンブリー（1939=1978: 53）の『須恵村』の2章注11に「わたしも裕福な居住者あつかいされて寄付をした」と書いている。当時27歳の若いエンブリーは神社の改修費用に拾円の寄付をしたのである。さらに資料12はアメリカの日系（民族）コミュニティの受難の記憶である。これらの記憶、記録がコミュニティのアイデンティティーを作るのは言うまでもない。

もちろんこれらは明確に記憶をとどめた稀有な事例である。しかし、地域社会での交流や参加や体験の記憶は、もっとささやかな形でも残される。「緊密なコミュニティでは、明示的な等化交換の取引は少ない。母親は提供したサービスに請求書を出そうとは思わず子どもを世話する。人を夕食に招いたら、いつかお返しをしてもらえるかなど気にせず食事やワインでもてなす人が多い」のである。このような「贈り物」は「贈り手がお返しを求めない点がミソで、贈り手が贈った瞬間に、もう贈り物のことを忘れた体裁をとってはじめて社会的絆が形成される」のである（ラジャン，2019=2021: 11）。ここにできてくるのが、居場所と帰属の感覚である。それが自尊心、責任感、当事者意識を高め、「コミュニティは私たちに力を持っているという感覚を与えてくれる」のである。言い換えれば、コミュニティはわれわれに「グローバルな力を前にしても、自分たちの未来を作っていくという感覚」を与えてくれる。また、「他の誰も助けてくれない苦境の時、救いの手をさしのべてくれる」（ラジャン，2019=2021: 3）のである。ここにも地域社会学の存立根拠がある。

神戸新聞NEXT

© 2023/6/14 05:30 神戸新聞NEXT

震災復興の思い出に一区切り
ア100人再会し「大同窓会」

神戸・長田の真野地区、中心メンバー高齢化 ボランティア



町を歩いて見つけた変化を地図に書き込む大同窓会の参加者たち＝神戸市長田区東尻池町6



約100人が駆け付け、真野への思いを語り合った＝神戸市長田区東尻池町6

阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた神戸市長田区の真野地区で10日、震災復興や住民運動に関わってきた人々による「真野まちづくり大同窓会」があった。震災復興を祈って2000年から5年ごとに開いてきたが、高齢化で発足当時のメンバーが減少。住民たちは「これで最後」との思いで、震災30年の節目を待たずに前倒しした。（小野坂海斗）

同地区は東尻池町や苅藪通などにまたがり、1960年代の公害反対運動を機に、住民主体のまちづくりが始まった。震災当時の人口は約5500人。早朝の激しい揺れで約6割の建物が全半壊し、19人が亡くなった。火災で43戸が焼失したが、住民や地元企業「三ツ星ベルト」の自衛消防隊が協力し、パケツリレーで延焼を食い止めた。

震災後、住民たちが一丸となって町を再建してきた。多くのボランティアも携わり、住民を支えた。震災5年後から犠牲者を悼み、復興を願う集会を開催。ボランティアも交え、回を重ねてきたが、地元の中心メンバーの多くが亡くなり、今では5人ほどに。その1人、清水光久さん（83）が今年3月、2年前倒しで開くことにした。

大同窓会当日、会場の真野地域福祉センター（同区東尻池町6）には、全国から約100人が集まった。「真野とのなれそめ」と題し、参加者がまちづくりに関わるようになった経緯を発表したほか、地域を巡って、町並みの変化を地図に書き込んだ。真野のランドマークだった三ツ星ベルトの広告塔が撤去されるなど、参加者たちは感慨深げに語り合った。

京都から参加した男性（53）は、震災1カ月後にボランティアとして同地区に入った。「当時は大学生。京都と真野を行き来して物資の配給などを手伝った。町のみなさんには仲良くしてもらった記憶しかない」と懐かしんだ。

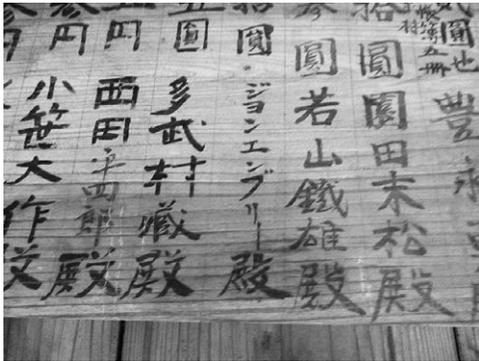
最後は震災の犠牲者だけでなく、すでに亡くなった復興の功労者たちにも黙とうをささげた。

集会を「最後」とするつもりで大同窓会と名付けた清水さん。「これで終わりではなく、再出発の日になりたい」という参加者の言葉を耳にして、ほほ笑んだ。「若い世代に真野の未来を託したい」。大同窓会が、震災後のまちづくりに携わってきた住民たちの思いを引き継ぐ場となった。

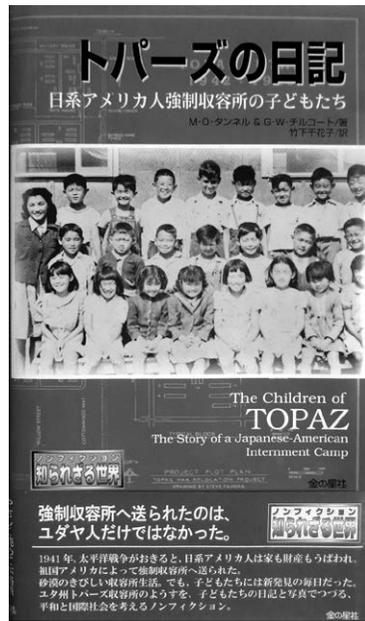
資料5 震災復興の思い出に一区切り

出典：神戸新聞，2023年6月14日

資料6 下関市，神田川の橋と改修年
山本撮影（2023年3月27日）資料7 神戸市，水害復興記念碑
山本撮影（2023年5月12日）



資料 11 須恵村, 神社の社の中の芳名板
山本撮影 (2015年2月1日)



資料 12 日系アメリカ人の強制収容の記録
出典 Tunnell & Chilcoat (1996=1998)

練習問題 ラジャンの考察を自分に引き寄せて考えてみよう。またラジャン (2021: 3-29) の書籍を直接読んで、コミュニティの重要性について、さらに付加すべき論点を探ってみよう。コミュニティはこんな美談ばかりじゃないかもしれないのである。

14. 地域社会学の研究対象：生活の本拠地としての聚落社会から (補遺 2)

もうひとつ、補遺を記す。集落社会という言葉についてである。聚落社会はコミュニティや地域社会と並んで重要な言葉である。ただし、聚落社会という言葉は、コミュニティや地域社会ほどには知られていない。しかし、聚落社会は地域社会学の土台に置くべき重要な概念である。聚落社会の解説は山本 (2023b; 2024) を参照して欲しいが、聚落社会は都市と農村 (と近隣) を含む。それは人間の暮らしの本拠地である。つまり、「歴史の長い間、人類は一人残らず何れかの聚落社会に所属する事によって生活を保って来たのであり、今日我々人間がもっているあらゆる文化はみなそうした生活の中に育成されてきたものと考えられる」(鈴木, 1969: 513) ののである。

人間の生活の本拠は「眠る場所と財産の貯蔵場所と家族の生活場所の集まっているところ」(鈴木, 1969: 301) である。この3つが集まっているのが「住居」である。そして、「自分自身と家族と財産」はいわば「自分の王国の全部」である。この「全部」を睡眠中にも、病気の時にも、風雨の時にも、また戦乱の時にも守ってくれるのが「住居」である (鈴木, 1969: 90-94)。

聚落とはこの住居 (本拠) の集合した場所 (本拠地) であるが、住居の集合だけではまだ聚落社会とはいえない。そこに「やや固定した社会関係」や「結社」の発生が必要なのである (鈴木, 1970: 275)。「自分の住居の安全のためには、近くに存在する他人の住居の安全が必要であることを、人はみな知っている」(鈴木, 1969: 90-91)。それで「聚落社会は、そんな願望をもっている人々が形

成する社会であり、相互に善意と協力を期待している人々の社会」なのである（鈴木，1969: 301）。この聚落社会に都市性が加わることを都市化という。すなわち、

- ① 聚落社会の上に社会的交流の結節的機関が加わってゆく過程
- ② 互いに面識している人々の社会に未知の人との社会関係が加わってゆく過程
- ③ 人と人との間の社会関係に合理性と自主性の増していく過程

という3つの現象がそれぞれである（鈴木，1969: 513）。ここに都市と農村という2つの聚落が分岐して、地域社会学の基本的な対象が立ち現れてくる。

本稿は前掲の山本（2023b; 2024: 2章12）とセットで書かれている。地域社会学の基底には、鈴木栄太郎の聚落社会と、本稿で取り上げたマッキィーバーのcommunityの概念が据えられるべきとの判断からである。本補遺において聚落社会について触れた意図はここにある。このふたつの概念は地域社会学の発想の地下鉱脈ともいうべきであり、地域社会学の最重要概念なのである。

練習問題 あなたの住居の集合した場所は安心して暮らせるところだろうか。聚落といつていいところだろうか。また、ぼつんと1軒で暮らすよりも聚落に暮らす方が安全であるという事例を挙げてみよう。

注釈

- (1) 籠山の規定では、生活の第一基本状態とは、エネルギー消費の総和(A + B + C)がエネルギー補給の総和(a + b + c)より大きな状態である。これは「疲労ある生活に他ならない」。そして、その逆のエネルギー消費の総和がエネルギー補給の総和より小さい状態が生活の第三基本状態であり、これが国民の好ましい生活構造とされる。籠山（1984）には第二基本状態という用語もあり、それはエネルギー消費の総和とエネルギー補給の総和がぴったり一致する場合だが、現実にはほとんどあり得ないとされる。
- (2) ウェーバーの行為には、外的(äußeres, overt)、内的(innerliches, covert)、放置・不作為(Unterlassen, omission)、我慢・忍従(Dulden, acquiescence)も含まれる(Weber, 1976: 1; Weber, 1978: 4)。本文の日本語訳は参考文献に示した清水訳による。
- (3) ここまでの説明では、ゲマインシャフトが道徳的に「良い」ものに思えるかもしれない。しかし、それはこの言葉の誤用であって、ゲマインシャフトはあくまで道徳中立的な記述的用語である(ニスベット, 1970=1977: 244)。
- (4) 佐藤の『皇道哲学』は戦前日本の「戦争の時代になってにわかに脚光をあびて躍り出た超国家主義者(風間, 1968: 415-416)」の書物である。ゾルゲ事件で検挙された尾崎秀実も裁判の公判にむけて「読みたいと思います」と書いて家族に差し入れのお礼を書簡に残している(尾崎, 2003: 76-81)。
- (5) Maciver & Page (1950) が出た当時の文明は冷戦によって、自由主義圏、共産主義圏、非同盟国の3つがあり、Maciver (1917) が出た当時(1917年)なら、西欧圏と西欧圏以外の2つがある、という理解がありえるだろう(ハンチントン, 1996=1998: 22-32)。なお、文明は「人を文化的に分類する最上位の範疇」とハンチントン(1996=1998: 55)は定義している。あるいは、「文明は『たれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの』をさすのに対し、文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団(たとえば民族)においてのみ通用するもので、他に及ぼしがたい。つまり普

遍的でない」という司馬遼太郎 (1989: 17) の理解も卓抜である。たとえば、青信号で進むのは文明で、日本の女性がふすまを両膝をつき、両手であけるのは文化である。信号はスリランカの道路に持ち込めるが、襖の開け方はスリランカの住宅に持ち込めないからである (司馬, 1989: 17)。

- (6) ここでの区 (ward) や区域 (district) は、東京の区部ではない。東京の区は、英語では city である (例えば、目黒区は Meguro City)。それに対して、地方大都市の区部は ward (例えば、神戸市中央区、福岡市中央区は Chuo Ward) である。したがって、ここでは一応、地方大都市の区をイメージして欲しい。
- (7) 1974年に書かれた報告書で既に次のようにある。「コミュニティという片仮名のコトバは、この数年間のうちに急速に全国に普及し、今では約七割以上の人が程度を別とすればコトバ自体は知っているまでになった」(鈴木, 1986: 135)。
- (8) ①は伝統的地域社会 (村落など) の研究、②は近代化以降の地域社会 (都市や村落) の研究を想起してほしい。
- (9) この分野の研究は近年始まったが、中森 (2022) のツイッターの分析を挙げておこう。

参考文献

- Abercrombie, N., Hill, S., and Turner, B. S. (1984) *The Penguin Dictionary of Sociology*, Penguin Books Ltd. (=1996, 丸山哲史監訳・編集『新しい世紀の社会学中辞典』ミネルヴァ書房).
- Anderson, B. (1991) *Imagined Communities: Reflection on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso (=2007, 白石隆, 白石さやか訳『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行—』書籍工房早山).
- Beck, U. (1986) *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag (=1998, 東廉, 伊藤美登理訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局).
- Beck, U. (2002) *Das Schweigen der Wörter: Über Terror und Krieg*, Suhrkamp Verlag (=2003, 島村賢一訳『世界リスク社会論—テロ, 戦争, 自然破壊』平凡社).
- Cooley, Charles H. (1909) *Social Organization: A Study of the Larger Mind*, Charles Scribner's Sons (=1970, 大橋幸, 菊池美代志訳『社会組織論—拡大する意識の研究 (現代社会学大系 4)』青木書店).
- ドストエフスキー, F. M. (原久一郎訳) (1962) 『カラマーゾフの兄弟 (1) (2) (3) (4) (5)』新潮社.
- Embree, John F. (1939) *Suye Mura: A Japanese Village*, The University of Chicago Press (=1978, 植村元覚訳『日本の村 須恵村』日本経済評論社).
- 本多勝一 (1967) 『極限の民族—カナダ・エスキモー ニューギニア高地人アラビア遊牧—』朝日新聞社.
- 本多勝一 (1993) 『アイヌ民族』朝日新聞社.
- ユーゴー, V. (豊島与志雄訳) (1987) 『レ・ミゼラブル (1) (2) (3) (4)』岩波書店.
- Huntington, Samuel P. (1996) *The Clash of Civilization and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster (=1998, 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社).
- 石坂啓, 本多勝一, 萱野茂 (2021) 『ハルコロ (1) (2)』岩波書店.
- 籠山京 (1984) 『国民生活の構造』ドメス出版.
- 風間道太郎 (1968) 『尾崎秀実伝』法政大学出版局.
- Kroeber, T. (1961) *Ishi in Two Worlds: A Biography of the Last Wild Indian in North America*, University of California Press (=2003, 行方昭夫訳『イシ: 北米最後の野生インディアン』岩波書店).
- Lynd, R. (with Lynd, H. M.) (1929) *Middletown: A Study in Contemporary American Culture*, Harcourt, Brace and

Co. (=1990, 中村八朗訳『ミドゥルタウン』青木書店).

Maciver, Robert M. (1917) *Community: A Sociological Study Being an Attempt to Set out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*, Frank Cass & Co. Ltd. (=1975, 中久郎, 松本通晴監訳『コミュニティー社会学的研究：社会生活の性質と基本法則に関する一試論』ミネルヴァ書房).

Maciver, Robert M. (1921) *The Elements of Social Science*, Methun & Co. Ltd.

Maciver, Robert M. (1947) *The Web of Government*, Macmillan Company (=1954, 秋永肇訳『政府論 上・下』勁草消防).

Maciver, Robert M. and Page, Charles H. (1950) *Society: An Introductory Analysis*, Macmillan & Co. Ltd.

Mauss, M. (1906) *Essai sur les variations saisonnières des sociétés Eskimos*, Editions le mono (=1981, 宮本卓也訳『エスキモー社会—その季節的変異に関する社会形態学的研究』未来社).

村上春樹 (2005) 「国民詩人としてのウディ・ガスリー」『意味がなければスイングはない』文藝春秋：243-276.

中森弘樹 (2022) 『「死にたとい」とつぶやく一座間9人殺害事件と親密圏の社会学』慶応大学出版会.

Nisbet, Robert A. (1966) *The Sociological Tradition*, Basic Books, Ing.

Nisbet, Robert A. (1970) *The Social Bond: An Introduction to the Study of Society*, Alfred A. Knopf (=1977, 南博訳『現代社会学入門 (1) (2) (3) (4)』講談社).

佐藤通次 (1941) 『皇道哲学』朝倉書店.

司馬遼太郎 (1989) 『アメリカ素描』新潮社.

新明正道 (1985) 『地域社会学 (新明正道著作集 第10巻)』誠信書房.

Oakley, Ann (1974) *The Sociology of Housework*, Martin Robertson (=1980, 佐藤和枝, 渡辺潤訳『家事の社会学』松籟社).

Ogburn, William F. and Nimkoff, Meyer F. (1940) *Sociology*, Houghton Mifflin Co.

尾高邦雄 (1995) 『職業社会学 (尾高邦雄選集 第1巻)』夢窓庵.

尾崎秀実 (今井清一編) (2003) 『新編 愛情はふる星のごとく』岩波書店.

Rajian, R. (2019) *The Third Pillar: How Markets and the State Leave the Community Behind*, Penguin Press (=2021, 月谷真紀訳『第三の支柱—コミュニティ再生の経済学—』みすず書房).

鈴木栄太郎 (1969) 『都市社会学原理 (鈴木栄太郎著作集第VI巻)』未来社.

鈴木栄太郎 (1970) 『農村社会の研究 (鈴木栄太郎著作集第IV巻)』未来社.

鈴木栄太郎 (1975) 『国民社会学原理ノート (鈴木栄太郎著作集第VIII巻)』未来社.

鈴木広 (1986) 『都市化の研究』恒星社厚生閣.

宗教社会学の会編 (1985) 『生駒の神々—現代都市の民俗宗教—』創元社.

高田保馬 (1947) 『世界社会論』中外出版.

高田保馬 (2003) 『社会学概論 (高田保馬・社会学セレクション3)』ミネルヴァ書房.

Tunnell, M.O. and G. W. Chilcoat., 1996, *The Children of TOPAZ: The Story of a Japanese-American Internment Camp Based on a Classroom Diary*, Holiday House. (=1998, 竹下千花子訳『トパーズの日記—日系アメリカ人強制収容所の子どもたち—』金の星社).

柳田国男 (1967) 『郷土生活の研究』筑摩書房.

山本努 (2016) 「集団・組織—集団や組織の何が問題か, その視点・論点—」山本努編『新版 現代の社会学の解説—イントロダクション社会学—』学文社：33-54.

山本努 (2022) 「全体社会」山本努編『よくわかる地域社会学』ミネルヴァ書房：18-19.

山本努 (2023a) 「社会学入門—富永社会学批判を含んで、高田社会学を軸にして」山本努・吉武由彩編『入門・社会学—現代的課題との関わりで—』学文社：13-41.

山本努 (2023b) 「地域社会—鈴木栄太郎の聚落社会の概念を基底において—」『入門・社会学—現代的課題との関わりで—』学文社：43-64.

山本努 (2024) 「都市と農村の社会分析—その現代的課題としての「都市的生活様式の限界」と「農村的生活様式の切り崩し」」山本努編『入門・地域社会学—現代的課題との関わりで—』学文社：2章 (近刊).

Weber, M. (1976) *Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr (=1953, 阿閉吉男, 内藤完爾訳『社会学の基礎概念』角川書店, 1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店).

Weber, M. (1978) *Economy and Society*, University of California Press.

自習のための文献案内

1. 山本努 (2023) 「地域社会：鈴木栄太郎の聚落社会の概念を基底において」山本努・吉武由彩編, 2023, 『入門・社会学—現代的課題との関わりで—(シリーズ入門・社会学 第1巻)』学文社：43-64.
2. 大道安次郎 (1959) 『マッキーヴァー (人と業績シリーズ 6)』有斐閣.
3. 内山節 (2010) 『共同体の基礎理論—自然と人間の基層から—』農文協.
4. Hillery, G. A. Jr. (1955) "Definition of Community: areas of agreement," *Rural Sociology*, 20, 194-204. (=1978, 山口弘光訳, 「コミュニティの定義—合意の範囲をめぐって」鈴木広編『都市化の社会学 (増補)』誠信書房：303-321).
5. 新明正道 (1985) 「地域社会の概念」『地域社会学 新明正道著作集 第10巻』誠信書房：4-34).

コミュニティ (あるいは地域社会学) の入門にはまず①から入るのがいい。鈴木栄太郎の聚落社会の概念は地域社会学を学ぶ者には非常に重要である。マッキーバー (の community) も非常に重要である。マッキーバーについては、初学者向けのよい解説が少ないが、②は優れている。著者の大道はマッキーバーの元で勉強した人物であり、マッキーバーの全体像がコンパクトに紹介されている。③は現代社会における共同体 (≒ community) の有用性、必要性を説く哲学者の書物。マッキーバーの community についても著者の理解が示されている。著者のマッキーバー理解と対話するのもいい。④はコミュニティの定義を検討する時に必ず参照される重要論文。著者によれば、コミュニティの定義は何と94とおりもある。その合意の範囲は地理的領域、共同の紐帯、社会的相互作用とされる。ただし、⑤によればヒラリーの④の論文は終着点でなく、議論のスタートであるという。⑤を読んで議論のスタートに立つといい。